

令和4年度第3回(第11期第6回)さいたま市社会教育委員会議 会議録

○開催日時：令和5年1月23日(月)15時00分～16時30分

○開催場所：別館2階 第5委員会室

○出席者名：【委員】若原 幸範議長、加藤 美幸副議長、石田 玲子委員、
井上 久雄委員、桑原 静委員、小森谷 由紀江委員、
関根 公一委員、千明 勉委員、塚元 夢野委員、
林 弘樹委員、溝口 景子委員、吉川 洋一委員、
亘理 史子委員

【事務局】(生涯学習部) 山浦 麻紀
(生涯学習振興課) 辰市 健太郎、馬場 智哉、竹居 秀子、
石田 悦子、伊藤 智美、清宮 雅貴
(生涯学習総合センター) 中村 和哉
(資料サービス課) 水澤 祐子

○欠席者名：佐藤 理恵委員、高山 俊介委員

○公開・非公開の別：公開

○傍聴人の数：なし

1 開 会

2 挨拶

3 議 事

(1) 報告事項 前回会議について

令和4年度第2回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

(2) 協議事項 第11期さいたま市社会教育委員会議提言の構成について

ア 提言内容発表

全委員が提言内容について、一人ずつ意見を提示した。

【意見】

<議長>

(1)の「学習の成果をつながりづくり・まちづくりにつなげていくこと」については、各地域で密着した活動を掘り起こすことが必要と考える。地域で活躍している方、あるいは学習活動をやっている方々に公民館等で活躍できる場を作ってみてはいかがだろうか。

例えば講師として登壇してもらうとか、展示の機会を作るとか、あるいは講座等で見学に出かけるとか、そういった形で地域の人と出会う場、また地域の学びに貢献できる場を作ることが出発点になる。

そこから地域課題などのテーマにつながり、まちづくりにつなげていきたい。

(2)については、これまでのワークショップでも出てきたが、生涯学習を実践してい

る方のモデルケースを提示することが必要だと思う。個人の学習からまちづくりにつながり、学習成果を社会活動に発揮できている方を探し出して、可視化することが生涯学習ビジョンの理念を理解してもらうことにつながると考えた。

<副議長>

まず(1)の方策について。例えば地域の魅力を発見して発信していくことや、歴史・文化・景観を見直すようなイベントを、コンテスト形式で実施してはいかがだろうか。デジタル形式で実施すれば、子どもたちや若者も参加できると思う。

あとは、月に1回とかの頻度で、図書館や公民館の交流フロア・ラウンジのようなところで、自由にやりたいイベントの提案をしてもらう機会を作る。

若い人に知っていただくことが大事なのでゲーム化をしていく。防災シミュレーションゲームとかライフサイクルゲームとか、コンセンサスゲームなんかを取り入れて、まずはイベントで人を集めていく。

あとは公民館・図書館に来館するのを待っているだけでなく、移動図書館とか出前公民館とかをより身近なところで実施する。あとは学校は学校だよりやホームページ、メールなどの情報発信機能を持っていて、それらは読者が一定数期待できるので、それらを活用して周知を図っていくというのも考えられる。

<互理委員>

地域での連携について。何でも良いので、乗れるものには何でも乗ってつなげていく。例えば盆栽は今年100年だそうで、市長さんが東京に盆栽を広めに来てらっしゃるといふニュースがあったので、盆栽だけでなく色々名物とか行事、隠れた地域の伝統芸能等乗れるものがあれば、それ乗って情報発信していくことも良いと思う。

もう一つ、地域の小さなサークルにも発表の場を与えること。毎年フェスティバルをやっていて、例えば今年はこの地域のどこかのグループが出展しませんかみたいなお誘いをしていくと、同じようなジャンルであっても、去年やった後また違う地域でやっている同ジャンルの団体で連携できるかもしれない。見える化につながると思うが、参加・発表する場に誘うことも良いと思った。

(2)の理解してもらう方策について。期間限定でしかも定点で宣伝を行う。例えば浦和駅のコンコースにはいつも色々な地方の名物が出ているが、柱一本で良いからお借りして生涯学習という言葉や、生涯学習ビジョンができたというお知らせを期間限定で行う。鉄道とか道路の活用。道路だと、赤信号で止まって左を見るといつもそこにフェスティバルのことや生涯学習のことが出ているというような、すごくアナログではあるが、掲示板みたいなものを設置するというのはどうだろうか。

既に(2)で挙げられているaとbの提言内容が、どちらも自然に目に入るものではなく、SNSとか、ユーチューブに自ら接触しないと出てこないのも、自然にそこ通ったら目に入るということもあっていいかなと思った。アナログで見せる。

<吉川委員>

(1)の多様性の視点について。本日の資料にも書いてあったが、やはり障害者の生涯学習の推進。身体障害、知的障害、精神障害、様々の障害のある方への学習について環境整備も必要であり、カリキュラムの中身も多様化している。

そこで障害者の社会参加とともに、生涯学習の推進に障害者という視点が入れば良いと思う。もう一つ逆に、障害者自身が発信をして、市民の方に理解してもらう福祉教育としての場の確保が必要だと思った。

またスポーツ協会として、さいたま市も埼玉県も非常にスポーツが盛んで、この前の国体でも沢山活躍されている方がいらっしゃる。そういった方々が地域に戻り、地元で発信できる機会をもっと沢山作りたいといつも考えており、そういった場があれば良いと思う。

<溝口委員>

まず、スポーツとか音楽とかアートなど別々のジャンルではなく、すべてと一緒に参加できるフェスティバルがあると良いなと感じた。さいたま市はスポーツのまちというイメージが強いが、私は個人的に音楽をずっとやってきたので、さいたま市交響楽団というプロの楽団のようなものを作り、地域のイベント等で毎回楽団が演奏してくれる機会があると、市民が音楽に触れられて良いと感じた。山形や群馬等ではそれぞれ地域にある交響楽団がすごく根づいているので、とてもうらやましいと感じている。

あとは学校教育の一環として、子どもたちがシニア世代にデジタル機器の使い方等を教える場があると、地域とともにある学校を進めているさいたま市には良いのではないだろうか。

そして最後にコミュニティ・スクールと地域の公民館等が連携して、学びの場を提供したりイベントを行ったりできる機会があっても良い。例えば、謎解きのゲームが今流行っていて、業者に問題作成を依頼してまで行っている学校もいくつかあって、すごく子どもたちには人気らしい。そういう取組が地域の皆様と一緒に行われると楽しいと感じた。

<林委員>

まず(1)について。やはり生涯学習という趣味重視というか、趣味とまちづくりであれば趣味に重点が置かれている印象があるので、結果としてまちづくりにつながっていくことを大事に考えるのであれば、なるべくそちらを主題として前面に出す形にしたい。

入口としては趣味としてというのが入りやすいし、そういう方々は沢山いらっしゃるので、起こしたい現象の方にフォーカスして、まちづくりにつながるためには色々学んでいかなければいけないので、例えば取組とかプロジェクトみたいな形でまちづくりのメニューみたいなものを明確化していくと良いと思った。

あと今回、消防団とシニアユニバーシティの事例ですごく良いと思ったのが、リーダー育成という点。最終的に地域を担っていく人材を育てていくノウハウを、特に消

防などはものすごく持っていると思う。広く生涯学習に関わる場所では、人材育成が必ずキーになってくるので、どういう方法で育成していくのかを特に大事にしていきたい、地域づくりにつながるという視点を大切にして、社会教育委員として提案していくと良いと思った。

あと生涯学習をどう理解してもらうかは、前にもお話をさせていただいたが、「生涯学習」という言葉を使わずにアピールしていきたい。国の提言にあるように、キーワードとしては「可能性」とか「チャンス」。例えば障害があり「自分にはできない」という先入観や、ジェンダーのこと等、様々なことがある。そこでリカレント教育のように、もう1回改めて学び直すことによって可能性が広がるというようなことを、「可能性」とか「チャンス」というような言葉でアピールすることで当事者意識が高まり、自分事としてとらえられるアプローチでPRしていくと良いと思った。

<塚本委員>

(1)について、①②③④に合わせて1個ずつ書いてみた。

①の学習活動の可視化・見える化というところに関しては、SNSやポスター等で「地域で生きる生涯学習人」のような、シリーズで紹介するものがあると良いのではないかと。この着想は、JRでよく見る「お客様の声をもとに改善しました」というポスターから得た。これがすごく面白いと思っていて「今まではこうだったけどお客様の声をもとにこうしました」と、簡潔にビフォーアフターで説明し、「今までごちゃごちゃだったけど階段に上りと下りのテープつけたのでこんなにすっきりしました」というようなものがあった。

そのような感じで簡潔に「誰かが学びました。そしてそれを地域で教えました」というようなパッと見でわかるような、SNSやポスター等で展開していくのが、「こんな学習をやっている、それが地域で生きている」ということの可視化につながると思った。

次は②と④の両方への意見として、活動を企画する段階で「この活動・学習が終わったら、それをさらに発展させたい人向けには、こういう活動に連携することができる」と、計画段階で落とし込むことが大事だと思う。計画・企画の段階で「この講習が終わった後にさらに深めたい人にはこれを提言します。具体的にはチラシを渡します」というようなネクストステップ、もっとやりたい人への受け皿を企画段階で提示することを一つ提案したい。

あと③の多様性の視点というか、外国籍の方についてのご意見として。資料の英語版・中国語版を用意すれば良いという話でもなく、当事者にしかわからないところもあると思うので、まず国際交流協会等と連携して個々の外国人コミュニティのキーパーソンへ活動を紹介したり、その地域の人に多国籍の人に紹介し、活動を広げるための改善意見をもらったりというところから始めると良いと思った。

(2)に関しては、SNSの活用としてフェイスブックもしくはインスタグラムを開発して活動のPRを行うだけでなく、いいねとかシェア数で反応の効果が測定でき、双方向コミュニケーションの場ともなるという利点がある。

<千明委員>

まず(1)については、同じさいたま市内でも各地域にある伝統や文化に応じた学びの機会を創出していくことが重要だと思う。私が勤めている岩槻であれば、人形やヨーロッパ野菜が著名なので、それらをコンテンツとして学ぶ機会があると良い。それが人づくりにもなるし、まちづくりにもなる。

その際にやはり世代間の交流という視点は必要で、高齢者だけでなく、若い人、それから子ども、皆で取り組むことが重要だと思う。やはり学びはインプットだけではなく、アウトプットして初めてその成果が確認できるので、発表機会の創出。これが(2)の理解にもつながるので、そういった機会を創出していくことが重要だと考えている。

<関根委員>

生涯教育がなぜこれだけ注目されるかと言うと、高齢者社会になってきたからではないかと考えている。その点では、高齢者に対する機会の提供が行政を含めて非常に重要ではないだろうか。

先ほど林委員からもご指摘があったが、いわゆる興味の範疇だけだとどうしても拡大しない。実体的に社会を作るためには、その中で具体的な仕事との連動をしていかなければならない。そういった組織としてはシルバー人材センター等があるが、ここには残念ながら教育が入ってなくて、ただマッチングになっている。この辺に生涯学習の要素を入れ、それから仕事のきちとした配分、社会全体の盛り上がりにつなげられたら良いと思う。シニアユニバーシティも非常に良い取組だが、興味にやや偏っているので、実体的な仕事につなげることもできると良いのではないか。

それ以外には表彰制度。これは低予算ででき、効果が大きいので是非お願いしたい。また、他都市との連携も併せてお願いしたい。

(2)の方は、皆様に情報を提供するツールについてのお話が多いが、私自身どこにポイントを置いてPRするかを考えた。

特によその都市と比べてどんな特徴がさいたま市にあるのか、というところを強調していただきたいと思う。先週、全国紙にさいたま市はSDGsでは国内で最も進んでいるという記事が出ており、それを読んで何かさいたま市は勝っているような気がして、急にすごく興味が湧いた。生涯学習については、さいたま市は図書館の数も非常に多いことは、最近私も認識したが、このように自負心をもって様々な展開ができるのではないか。理解してもらうためには、よそと比較することも効果があると思う。

<小森谷委員>

(1)の方から提言させていただくと、まずはさいたま市には生涯学習人材バンクがあるが、個人でアクセスしなければならないのでどこかに間に入ってもらい、講師につながるような仕組みにできないかと思っている。

私自身も以前に生涯学習人材バンクを見て直接やりとりをしたが、なかなかうまくつながらなかった経験があるので、もっと広く世間に知っていただく意味でも活用し

ていきたいと思う。

あと学習活動のネットワークについて、学校には学校地域連携コーディネーターという方もいらっしゃるので、アンテナを少し高く張っていただいて、地域のボランティア活動をされている方や公民館で活動されている方を、土曜チャレンジスクールや放課後チャレンジスクールで活用できたら良いと思った。

もう一つ、(2)についてだが、ユーチューブやインスタグラムでの動画配信にもすごく発信力があるが、高齢者の方にはなかなか難しい。思うに本当にアナログではあるけれど、地域で回る回覧版はやはりすごく効果があると思うので、公民館でも冊子を一冊ずつ見るとか、掲示してあるものを見るよりも、デジタルサイネージで大きく「こんな催しや機会があるよ」というようなお知らせができるものがあったら、高齢者の方にも伝わっていくのではないかと感じた。

<桑原委員>

(1)について大きく二つ考えた。

一つ目は基本ではあるが、人と人が出会う場をとにかく増やすことで、それには世代で区切らないということである。

趣味とか学習の場であれば元々世代で区切る必要もないのだが、公民館とか様々な場で行われる催しで、明文化されて「何歳から」と対象がしっかりしているものもあれば、無意識のうちにデザインや言葉で何となく特定の世代向けに設計をされているものもある。

本来ならばデジタルリテラシーとか色々な問題について、様々な世代がいることで解決できることもある。また、色々な世代がいると気づきも多く、また次なる活動への広がりも、機会もチャンスも増えると感じている。

もう一つは、情報発信の強化というところ。やはり一緒に学びたいとか、うちのグループに入って欲しいとかの希望で、皆様情報発信を沢山されているが、上手なところもあれば、上手じゃないところもあり、やはり自分のやりたいこととか、自分たちの活動であるとか、そういうところのリテラシーというか、己は何なのかとか、それをどう伝えればいいのかとか、その伝え方をもうちょっと強化しないと出会いがないのではないかと感じる。

<井上委員>

小森谷委員と被る意見になってしまうが、人材の活用方法として、人材バンクの有効的な活用が欲しいと考えていた。小森谷委員のご意見と同じ思いである。

また(2)に関して、やはり現代的なツールが主に載っており、高齢者としては活用が難しいので、公開で双方が話し合える機会もあれば良いのではないかと。実施は大変だと思うが、ICT的なツールを活用できない多くの人もいるということもご理解いただきたい。

<石田委員>

公民館での講座の受講者の同士の交流を試みることをもっと推進して欲しい。例え

ば先日行ったワークショップ方式等は、非常に効果的だと思った。あとは自己紹介ゲームとか、なぞなぞとか、質問コーナーとかを行うのも良いかと思う。

私は現在、個人的に見沼区学というものを受講しており、そちらで先日フィールドワークを実施したのだが、普段は受講者同士が話すことはないのに、その際は沢山の人が発言して交流できたのがとても良かった。それが地域のつながりづくりにつながるのではないかと思った。

一方で少々残念なのは、やはり外国籍の方の受講がないので、英語がやはり世界の共通語なので、英語のチラシを作ることもこれから必要なのではないかと思う。

「生涯学習ビジョン」というと難しく感じる言葉で、その言葉を聞いただけではどういうことなのかいまいちわからない方もいる。小学生でもわかるような言い方はないかと私も考えたのだが「あなたの好きなことを長く続けてみましょう。仲間をそれで作りましょう」とか、もっと簡単な言葉にしたらまちづくりにもつながっていくのではないだろうか。

イ 意見交換

自身の発表の補足、互いの提言内容についての意見や質問、話し合いを行った。

【意見・質疑応答】

<林委員>

先ほどの地域を担っていく人材という話の付随情報としてお伝えしたい。

僕自身、色々な企業の新卒採用とか、若い世代はどういった働き方をしたいと思っているのかとか、志望動機とかの調査データを収集していて、金融業界をはじめ製造業からサービス業も含めて話を聞くことがある。

そのデータを見て一番驚いたのが、今の若い世代の人たちの志望動機で「世のためや人のために役に立つ、立てる仕事がしたい。だから御社で働きたい」というものが多いことである。まさにソーシャルの時代というか、それこそ20年、30年前では考えられない、当時だったら自己実現という動機が多かったかと思う。

そういった意味では、若い世代にはまちづくりか何かの役に立ちたいと、そういう場を求めている子たちが実はものすごく多い。彼らはそういう「力を貸して欲しい」みたいな呼びかけを待っているということを皆様と共有したい。

<議長>

皆様のご意見をいくつか現時点でまとめたいと思う。

一つ目が、学習が個別化・個人化しがちなところがある中で、個人の学びからどうつなげていくのかということである。

今出たご意見の中で、例えばインターネットの人材バンクがあるのだが、インターネットを活用して自分で検索するとそのまま個人利用になってしまう。それを個人にとどまらない形でどうつなげていくのか。またつながったとしても、例えば同じ世代だとか、同じような関心を持った人同士はある程度つながるのだが、例えば障害のある人とない人だとか、世代が違う男性・女性だとか、国籍が違うとか、そこを超えた多様なつながりを、生涯学習・社会教育の場でどう作っていくのかについてご意見を

いただきたい。個からつながりという点と、また多様なつながりについてである。

もう1点ご意見いただきたいのは、つながりからまちづくりへの部分である。今回のビジョンでもそこは重要なので、皆様にご意見を伺いたい。

先ほどの報告で林委員から、どうしても生涯学習って現状では趣味にとどまりがちなどところがあるが、入口として趣味があるとしても、そこから次のまちづくりにつなげていく際に、社会教育の場でどういう工夫ができるのかという問いかけがあった。

この2点について、個からつながりという部分と、つながりからまちづくりへの部分についてご意見いただきたい。

例えば多様なつながりというところでは、何人かの方からフェスティバルとかイベントをやるときに多様な方が、例えば小さなサークルでも発表できるような場を用意するとか、あとは世代を区切らず参加できる機会を沢山作るとかの意見があったと思うが、そういった具体的なアイデアも含めてお願いしたい。

<桑原委員>

石田委員の最初のアイデアがすごく良いと思った。

色々な公民館等で無数の活動が行われている中で、自己紹介って実はやっているようでやっていなくて、私たちも何回も会っているけど実はお互いのことを知らなかったりして、結構いつもいるグループでも定期的な自己紹介だったりはじめましてだったりの挨拶というのはすごく大事だと思う。それを「さいたま市版あいさつ」として広めれば、小学校とか中学校とか大人でも、そういうシンプルなどころからつながりができるのがすごく良いアイデアだと思った。

<石田委員>

私がやっている書道教室では、自己紹介ゲームというものがある。自分の名前と好きなことを書くというもので、もちろん字を綺麗に書くことが目的ではあるのだが、何枚か書いて、大人と同じように名刺交換して自己紹介という形にしている。そうするとその子が好きなものがわかるので、そこから話のきっかけができる。これは大人でも同じではないかと思う。

<議長>

個人の自己紹介から始めて、小さなことから自分を発信していく機会になっている。自己表現する機会でもあり、そういった場を多様に設けるのは重要。

<林委員>

多様性の入口として、桑原委員のご意見が印象に残っている。

我が家も色々な生涯学習をやっているが、例えば卓球をやりたいとか囲碁をやりたいとか、写真をやりたいとかいったときに、結構条件がつけられていてすごいハードル高いことが多い。何歳以上じゃないと駄目だとか、どれぐらいできる子じゃないと駄目だとか、ちょっと背が小さいと駄目だとか。実際どういう条件だったら良いのかと問い合わせても、個人情報の関係で直接連絡をつなげられないので、実際その時間

に行くしかないこともある。その日に一応予定はあるが、来てみても実際にできるかはわからないみたいな、結構なかなかハードル高いものもある。

さいたま市の生涯学習も公民館活動とか図書館活動とかスポーツも様々あるかと思う。そこにダイバーシティというか、どんな方でも挑戦できる、可能性があるというような枠組みはできないだろうか。

公民館活動を初めとする生涯学習に関係するところは「どんな方でも学ぶ機会とか経験する機会とか、挑戦する機会を得られるようにしていきましょう」と、もう1回呼びかけることもあっても良いのではないかと気づいた1年であったと、桑原委員の話から思い出した。

<副議長>

ハードル下げるのは本当に大事なことだと思っている。

特にデジタルデバイドの方などは「こういう講座をやりますから参加してください」と言ってもちょっと無理とってしまうので、ただ講座があって参加するのではなく、例えば公民館とか図書館とか行きやすい身近な場所にいつでも行けるような場所があって、いつでも相談に乗ってくれるようなコンシェルジュみたい方がいて、その人に合った相談に乗ってくれる場所を作ればいいのではないか。

先ほど交流会という話があったが、はい集まってくださいということもなかなか難しい。公民館等にはサークルが沢山あって、似たようなことをやっているけれど仲が良いわけではないとか、交流がないとか、隣の公民館と全く何もつながりもないというようなこともあるので、例えばある程度その公民館の中や、ちょっと近場の公民館でまとめて、部活化してみる。ちょっと大きな音楽部とか、あとユーチューブとか観光部とか、似たようなところを集めて、部活だから来ていいよということで交流会をやって、先ほどの自己紹介ゲームから入ると、共通の話題がいっぱいあってきっと仲良くなれるので、似たところを集めて広げていくみたいなことをしていけばいいのではないか。

あと自己紹介ゲームという話で、「無人島とか宇宙に放り出されました。こういう道具しかありません。それで数人で集まって相談して、何が一番必要かというのを点数化して」みたいなコンセンサスゲームがあるのだが、とても若者は面白がってやるので、自己紹介をしたらそういう仲間づくりの、ちょっとしたゲームをやっていくと良いのではないかと思った。

<議長>

いつでも気軽に相談できるシステムは大事だと思う。先ほど人材バンクの話でもあったが、近年は何事もインターネットを通しがちだが、例えばふらっと公民館に行けばいつでも相談できるとか、そういう体制が必要な気がする。

また公民館のサークル同士等の関係性をどう作っていくのか。10期委員のご意見だったと思うが、かつて公民館の使い方などもサークル同士で話し合っていたけど、今はインターネットで申し込めるようになり便利になったけれど、その分交流もなくなってしまったということも印象的なエピソードとして覚えている。少々わずら

わしいところもあるかもしれないが、改めて意図的につながりができる環境づくりを、併せて考える必要がある気がした。

<生涯学習振興課長>

公民館のコンシェルジュは以前に構想があったのだが、残念ながらまだ実現には至っていない。

個人的な話で恐縮だが、私は昨年まで大砂土東公民館の館長していた。新型コロナウイルスワクチンの予約がオンライン上でできるようになった時に、高齢者の方や不慣れな方向への予約代行を区役所と公民館で行っており、普段公民館を利用されない方が最初はワクチンの予約で来たのだが、そこで本当に感謝してもらえたのと同時にそれを機に公民館を訪れるようになり、講座に参加してくれたこともあった。

それから周知、情報発信について。SNS等を活用する一方で学校だよりとか公民館だよりとか、回覧版といったアナログの話をされていたが、オールさいたま市で考えたら本当に色々なツールを持っているが、それを戦略的に使いこなすことは課題に感じている。それぞれの部署ごとで発信しているため、受け手側、市民の方からするとわかりづらいし、探したいものは見つからない印象があると思う。

我々としては、当課で生涯学習情報システムを管理しているので、これをより有効的に活用する方法を模索していきたい。

<生涯学習総合センター副館長>

先ほどから公民館についても色々なご意見を頂戴しているが、まずは職員の資質向上が重要だと思っている。Wi-Fi、インターネット環境が入り活用するにも、職員が対応していかなければならない。

先ほど、公民館に来ていただければこんなことを教えてもらえる、といった色々なご提案をいただいたが、やはりボランティアの方を育成や、どんどん変わり行く公民館活動の事業の中で、職員の人材育成は非常に重要な課題だと認識している。

<生涯学習振興課参与>

さいたま市では10数年「カイゼンさいたまマッチ」という事業改善を披露する事業を行っているのだが、今年から「DX（デジタルトランスフォーメーション）賞」というものが設けられ、その第1号として桜木公民館が選ばれた。

実際に何をしたのかというと、公民館では各館がそれぞれ発行している公民館だよりを壁一面掲示しているのだが、併せてQRコードを掲示し、それを読み取ったら生涯学習情報システムのページに飛んでイベント申込をすぐにできるように工夫した。

しかも、その場でわからない高齢者の方にもすぐに職員が対応してご説明し、OJTではないが少しずつ学んでいくことで、今度は仲間同士で教え合っているという光景も見られている。

先ほど林委員が若い人たちがまちづくりに興味があるとおっしゃっていたが、令和2年度の市民意識調査を分析したところ、実は30代の男性・女性ともにまちづくりに興味があるという結果が出た。一方で「さいたま市生涯学習市民意識調査」では、

男性も女性も、特に特徴的なのは男性が、「子育てや家事で忙しく、生涯学習ができない」と回答している。そこが一つの課題である。

また、加藤副議長からサークル同士のつながりについてのご意見をいただいたが、確かに今、高齢者のサークルが小規模になり過ぎて、その小規模のサークルが数人で体育館とホールを使うので部屋不足が起こっている状況もある。その課題解決にも部活動は良い方式だと思った。

<副議長>

なかなか公民館も人員も少なく大変だと思う。そこで、職員がするというよりは、先ほど部長のあいさつで埼玉県立飯能高校の「すみっコ図書館」のお話があったが、公民館や図書館にヤングアダルトのためのコーナーを作って、高校生や大学生に運営を任せ、危険なことや思想的なことは職員がチェックしていくようにしてはどうだろうか。

私も大学生に教えていたら「公民館とか図書館って暗くて静かすぎるイメージがある」と言われた。そこで、どうしたら明るくなるかと投げかけたら、最近の若い人は色々な発想を持っているもので、自分たちが運営できるようなコーナーを作って、ゲームができるとか、交流ができるとか、居場所づくりをしていきたいという提案があった。若い人たちにとにかく施設に来てもらい、そこから何かやってみないかと誘導することで、例えばゲーム大会のようなイベントをやって取り込むとかも良い。

次に2点目のまちづくりについて。関心はあるけどなかなかやはりハードルが高いのが課題なので、防災とか健康だとか、環境のSDGsとか、エコとかそういったものだったらとっつきやすいし、アートって割と誰でも好きなので、ダンボールアートとか、あとは防災のイベントに親子で参加したらポイントをもらえるなど、子どもって服がすぐ小さくなったり、おもちゃもいらなくなったりするので、そういうものを集めて、それを景品としてポイント交換できるシステムを作っていくと面白いと思った。

<議長>

学生に運営を任せたり、あと他の町では障害のある方が公民館でカフェをやったりという活動もある。そういう活躍の場を公民館の中に設けると、学習成果を生かす場にもなってくると思う。そういう場を公民館を拠点として考えるのは大事である。

<桑原委員>

若者の参加について、先日大分県のまちづくりセミナーの講師をしてきた。

下は10代から上は80代ぐらいまで参加しており、半年間掛けて結構長く形にしていくようなセミナーで、まさしく30、40代の男性の参加がすごく多かった。

それらの普段サラリーマンとして働いている人たちが、最後皆同じことを言っていたのが印象に残っていて、それは「自分と同じ思いをこんなに沢山の人が抱えているって知らなかった。ここに来て初めて知った」ということ。だから多分、個々にアンケートをとるとすごく意識が高いとわかるけれど、それをお互いが知らない状況なの

だということがよくわかった。だから皆子育てや仕事で忙しいけれども、それでもやはり来ている人がすごく多くて、何か忙しそうだとか、その先入観であまりストップをかけないで、どんどんまちづくりという視点で講座とかセミナーを企画していったら良いのではないかと改めて思った。

<塚元委員>

多様性と若者の活用に関して、桑原委員が最初におっしゃっていた「対象者を明確に絞っていることもあるけど、何となく雰囲気で見えない対象者縛りが生じていることもある」という話にとっても共感した。

私もボランティアのサークルに所属したくてお話を聞きに行ったのだが、高齢者の集いと化して、「お呼びじゃないかしら」と思い二の足を踏んでしまったことがあった。本当は私が先陣を切っていかなければならないと思うが「なるほど、見えない対象者縛りとはこういうことか」と痛感している。

広報の方法についても、私がSNSだなんだと言って、かたや小森谷委員や石田委員が回覧版の活用とおっしゃっていたが、我々のようなアパート住まいには回覧版が回ってこない。そもそも地域コミュニティに入る機会もなかったりして、30代からしたらもうSNSとか何かしら検索するしか方法がなかったりする。

とはいえ対象者を縛らないなら、チラシも作るしSNSもやるし回覧版も回そうというのも現実的ではないと思うので、対象者を縛らないという理念を掲げながらも全部やるのではなく、戦略的にやっていく必要があると思っている。

例えばそのシニア団体がもっと若い人が欲しいのであれば、インスタグラムに何か投稿してというように、対象者を縛らないからといって広報も全部やるというのではないと感じた。

ウ 総括

議長・副議長より本日の議論の総括を行った。

【総括】

<副議長>

やはり皆様がおっしゃったように、とにかく参加しやすさだとか、ハードルを下げていくことが重要で、そのことが町の発展、生涯学習ビジョンの実現につながっていく。色々な人が色々なことを既にやっていて小さなグループが沢山あるので、そこをネットワーク化するような取組をしてけたらというのが一つ目。

二つ目の理解してもらうためには、やはりデジタル社会はもう進んでいるので、デジタル化に対応できるように、デジタルデバインドの方のサポートをしていく。プラスでやはり様々な機会をとらえて広報していくことが必要だと思った。

あと生涯学習ビジョンというやはり言葉が難しく「生涯学習とか自分には関係ないよ」というイメージになってしまうので、わかりやすい言葉で伝えたい。このビジョンというのはとても大事な考え方で、これがあるから皆様が楽しめるような色々な事業があったりイベントがあったりするのだ、ということをPRしたい。

<議長>

私も同じようなことを考えながら皆様のご意見を伺っていた。

特に今回提言書をまとめていく上で、これまでのワークショップの中で、キーワードや方向性は見えてきたが、それを実現させていこうと思うとやはり難しさがあると改めて感じた。例えば参加のハードルを下げようというときに、誰でも参加できるというハードルの付け方もあれば、逆に対象を絞ることで、ハードルが下がる人もいる。そのあたりのバランスをどうするのか。また情報発信の仕方も、最後に回覧板の話もあったが、アナログな発信方法とインターネット等を活用したデジタルの発信方法それぞれに使える人使えない人がいることを考えると単純ではない。

これらをどう提言のレベルに落とし込むのかはこの後考えていきたい。特に重要なのは先ほど申し上げたが、今回のビジョンのポイントになるのは、生涯学習をまちづくりに結びつけてどう発信していくのかということだと思う。その点沢山のヒントをいただいたので、考えながら文章化していきたい。

4 閉 会

以上

(1) 個人の学習成果がつながりづくり、まちづくりにつながり、地域社会の発展に生かされるための方策

① 学習活動の可視化・見える化について

a

市民に対し、その目的に応じた活動の選択肢を提示する	SNS、ポスター等で「地域で生きる生涯学習人！」シリーズで紹介 Ex) 学んで→地域還元	学習成果の発表機会の創出
---------------------------	-------------------------------------------------	--------------

情報発信強化	発信の手伝い	伝え方を学べる
--------	--------	---------

表彰制度による評価
低予算で可能
(分野別チームを対象)
(満足感・達成感)

② 学習活動のネットワークや地域での連携について

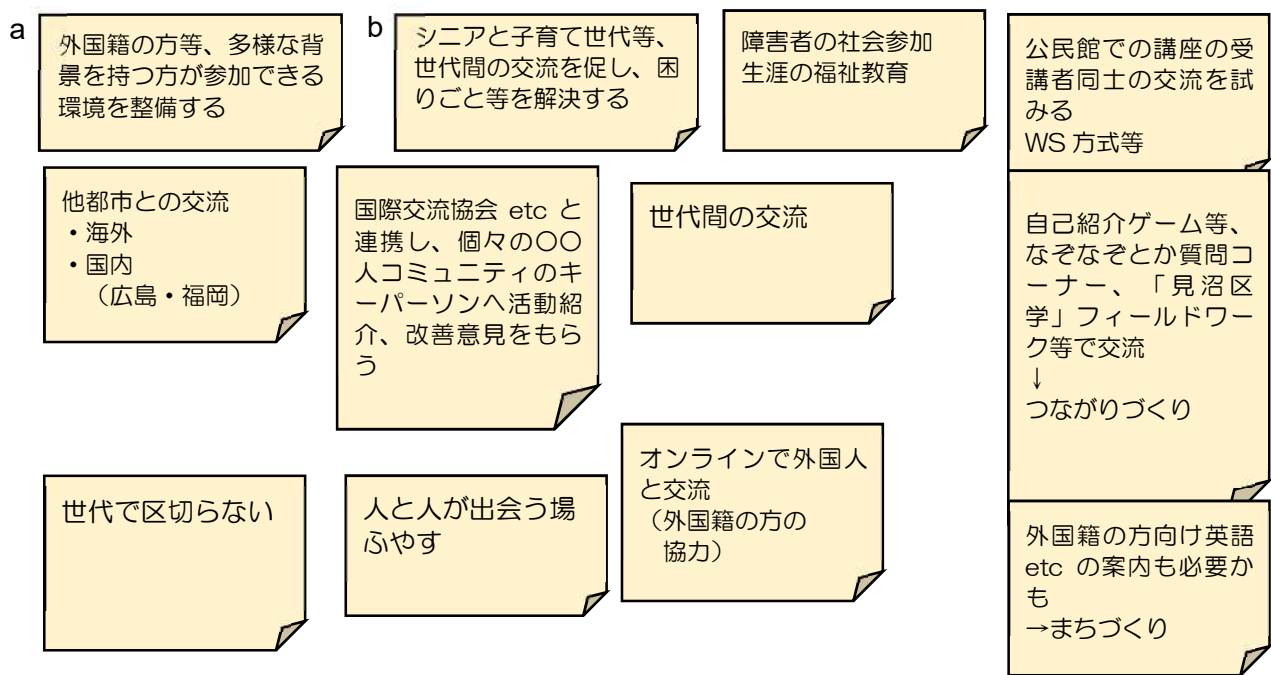
a

行政組織の中で分かれている団体や機能のネットワークを強める	b	c	
	既存のネットワークを利用し、新しい活動を行う	他都市、組織等をベンチマークやライバルとして、交流を図っていく	スポーツを通じての地域づくり

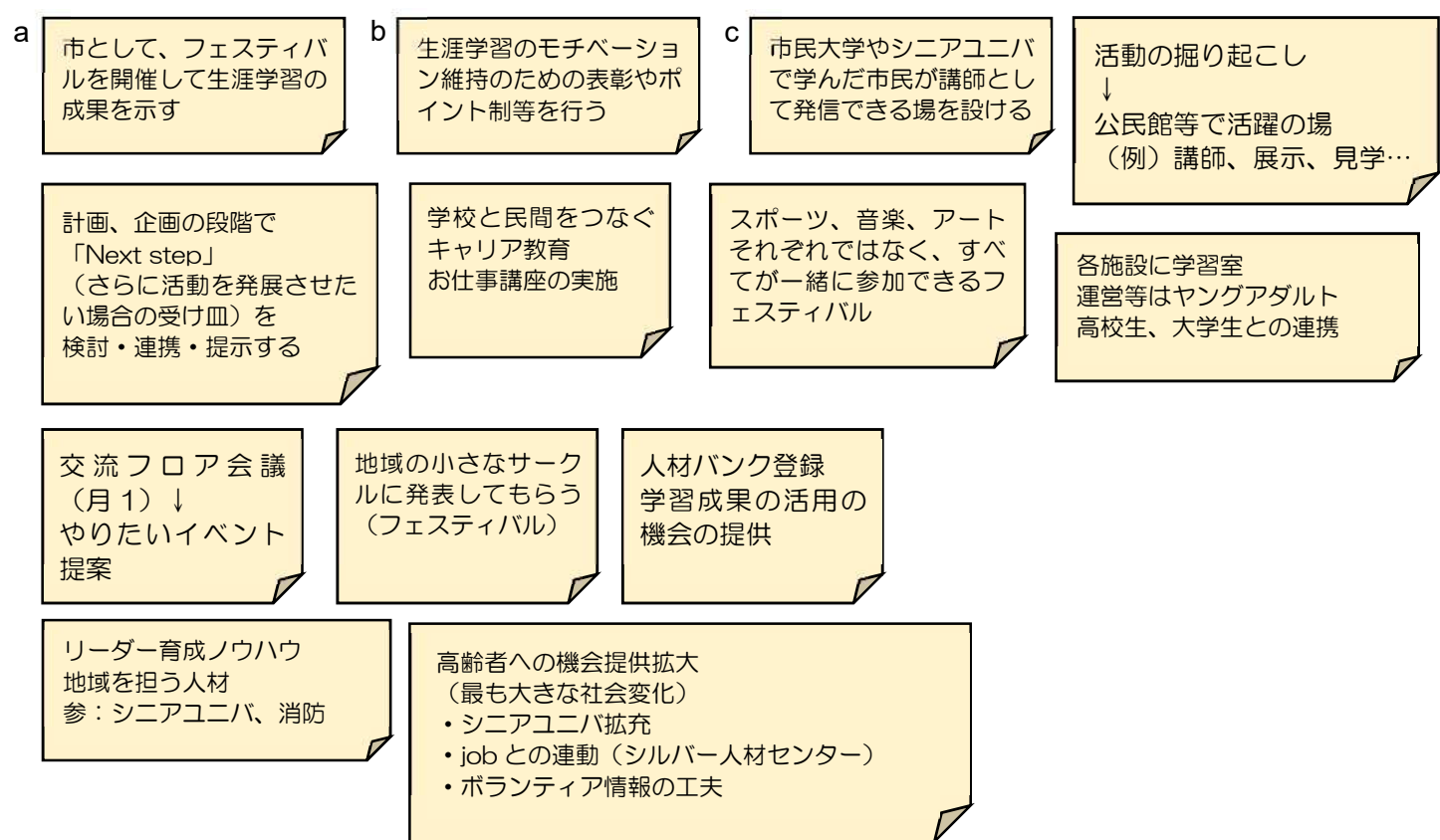
学校教育の一環として、子どもたちがシニア世代にデジタル機器の使い方を教える 地域とともにある	各地域の伝統や文化に応じた学びの機会の創出	生涯学習人材バンクの活用	学校教育と地域との連携活性化
---------------------------------------------------	-----------------------	--------------	----------------

生涯学習センター等の発表会 発表する場を作る 区民まつり	〇〇100年等 乗れるものには何でも乗っかってつないでいく 盆栽 100年…	公民館に〇〇部をつくる サークルを越えた部活(アート) ・ユーチューブ部 ・リサイクル 顧問 オンライン
------------------------------------	----------------------------------------------	------------------------------------------------------------------

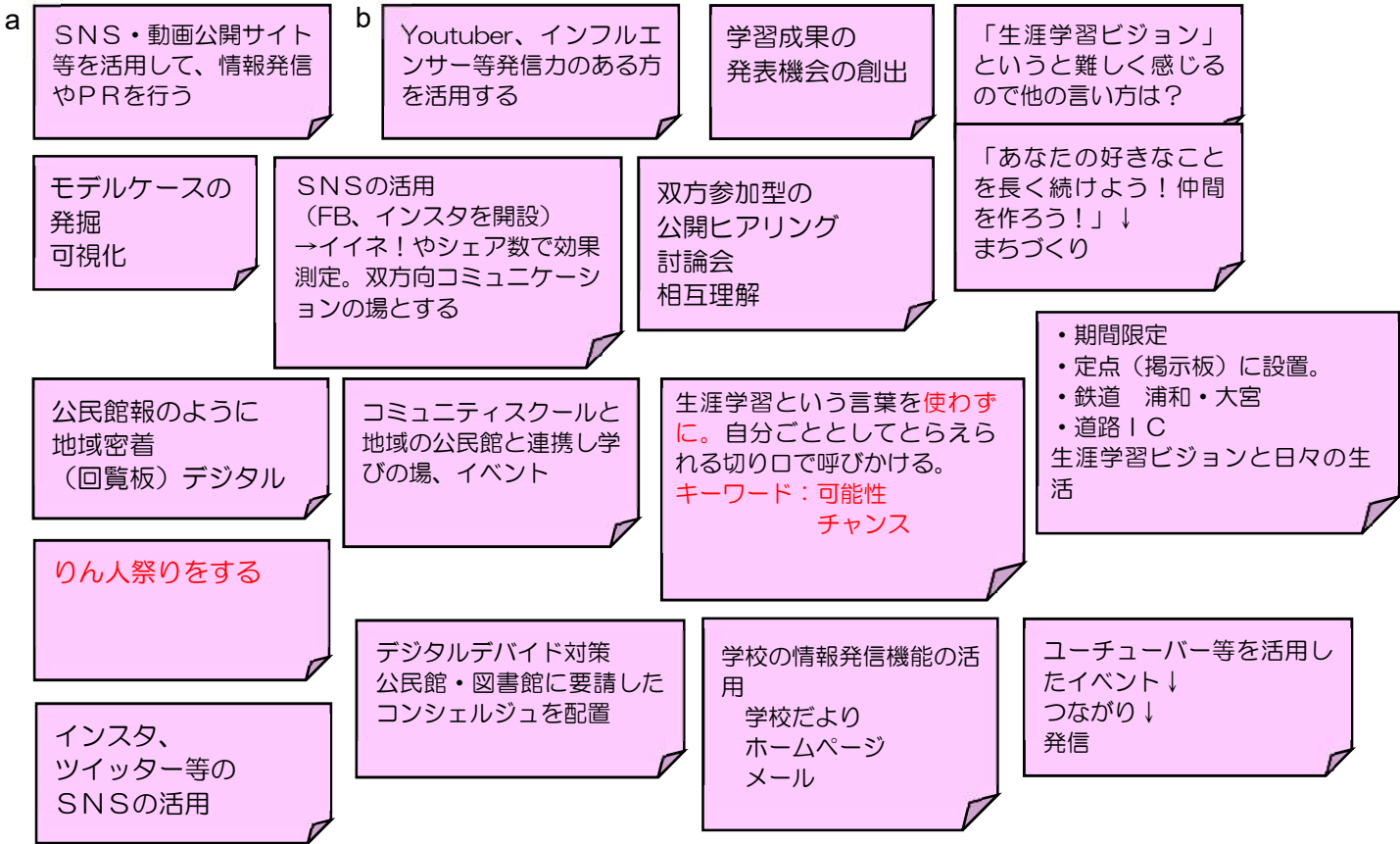
③ 多様性への視点について



④ 学習成果の生かし方・活躍の場の提供について



(2) 市民と生涯学習提供者双方に
生涯学習ビジョンを理解してもらうための方策



その他提言案・ご意見等

